

◎7:30 茨木出発。行程表で10:30登山開始と書いていたがまさにピタリ、大又の駐車場から歩き始めた。

◎今回の参加は、相澤・前川・堀井・磯辺・山田・岡村の六名。「車一台で狭くない」「ギューギューで行きましよう」とメールのやり取りの末、7人乗りの相澤車で出発した。「朝起きは無理」磯辺さんが夜の10時ころ来宅、「これ飲もう」とカップ酒を二本持参、簡単あてで12時ころまで話し込んだせいか気持ちが昂ぶり1時ころまで眠られなかった。朝は阪急茨木駅に山田さんを迎え相澤Pへ、三人はすでに荷を積んでいた。

◎去年足の骨折をした相澤さん、ペースメーカーを入れている最年長の堀井さん、弱い方がおられるのでゆっくりペース、30分一本のペースで休憩をとった。渡渉がある、水量の多い流れの早い沢の石を伝って渡る、ロープを渡してくれているが、落ちれば危険、「え どうしよう」「こっちの足はどこに置くの」とさわがしい。

◎渡渉は4回あった。渡渉は危険なこともある、石が滑る、石が動く、転ぶと、打ちどころが悪ければ大怪我になる、流れにのまれると命も危ぶまれる。昔、「ここは恐い 石から落ちたら たいへん」と水の中を歩いたことがあった。水の中を登山靴で歩くと当然ながら靴の中はびちゃびちゃ状態、これは嫌だけれど怪我にはかえられないと敢行した。次の日の山行は、足元が不快なものだった、濡れた靴は嫌なものだ。靴を脱いで水の中を歩く、ごみ袋を靴にかぶせるが完全防水は無理だ、みなさんいろいろ試しているやも、である。

◎1:00「もうすぐ 目的地 食事の湯を 沸かして おきますね ゆっくり登ってきて」荷を下ろした。ザックの中のヌードル・コンロ・ボンベを出し、ヤカンに水を入れ、火をつけた。

◎みなさんもふうふう登ってきた。休憩を4回とった、2時間半かかったが、ほてった顔がごきげんである。「オレは早く歩いては いけない」という反省から、水を3リットルかついできた。

◎食事は、おにぎりがふたつ（相澤・前川作）、カップヌードル、たくあんに果物、ドリップコーヒー。燃費の悪いオレは、いただいたパン（これはいつも 燃費の悪い岡村さんへ と 堀井さんからいただく）やら、ポタモチやら、なんとすべて完食である。

◎1:30 食事が終わって、「檜塚奥峰 往復は時間がかかりすぎる 国見なら1時間強で帰ってこられる ちょっと待って て」と山田・岡村で歩きだした。「ここは前に 来たことがある」と思い出した。国見のてっぺんから、元スキー場が、みなさんが待っているあずま屋が見えそうな気がするが自信はない。

◎いい感じの尾根道歩き、樹々の新芽は膨らんでいるが、まだ緑はまったく見えない。尾根道の木はつよい風と雪で、大きくは育っていない、少し下がると太く若々しく、力みなぎった樹々がちらほら。

◎国見山山頂：1418Mと記されている。白い石がゴロゴロのてっぺん、ここらあたりは霧氷で有名なところだが、今年は見損なった。冬に何度かやってきたが、霧氷とのタイミングが悪かった。

◎たったりと山々の尾根が連なっている。昼めしを食った場所に戻ってきた。「今晚はここでテント」というおっさんに出会った。「三日間 ここにいる」「すごいねえ テントで連泊とは」向こうにももうひと張りいるそうだ、「今夜は満月 山菜を食って 一杯飲めば 最高だ」というご仁なり。

◎バイケイソウ：緑の葉っぱがむくむく大きく地面から這い出している。調べると白い紡錘形の花の塊の写真、こいつは見たことがある。まだ地面から葉を出しはじめたばかり、どんどん育っている感じ。

◎ハシドコロ：濃い紫の小さい花、中に黄色いおしべだかめしべだか、「なんと妖艶な花」と思って見ていた。途中にいくつか咲きかけていた、昆虫が蜜に群れて花のまわりを出入りしている。

◎4:30：下りも同じように四回の渡渉、「おややや わややや」と賑やかな怖さを乗り越え、無事皆さん車の所まで帰ってきた。汗で濡れたシャツを着替え、残っているサンドイッチをほうばった。

◎「近鉄の桜井で降りしてくれませんか 電車でまっすぐ京都まで帰りたい」山田さんが言うので、駅をナビに入れ出発した。少し走ったところの湧水を汲んで帰った。湧水でコーヒーを入れると、旨いかぎりなり。

◎磯辺さんも翌日は、「フリマで売らなければ」と茨木から能勢方面に帰っていった。残り四人で、食事会、ビールに焼酎。串カツにサラダ。うまいうまい。交通・食費1500円食事会2200円也。

◎明神は二年ぶり、榊井君の家に寄ったが、人影がない。水彩画と名刺を置いて帰った。上等ソーメン屋也。

花粉症がいつごろから出始めたのか、「十年 経つかなあ」と思い出している。春という季節に身体的な不快感はなかった、花粉症なぞよそ事、他人事だった。森林や山に入り、そこに植えられている緑の塊、針葉樹群が風に揺られ、黄色っぽい煙をくゆらせいるさまをよく見かけた。「花粉が飛んでいる」と叫んでいた。

まわりの人たちが悩んでいた、苦しんでいた、「ティッシュ ひと箱が 一日で 無くなる」「ハナタレ クシャミ 情けない」そういう症状の人たちを横に見て、「オレには 関わりの ネエ話」などとほざいていたが、オレにも人並みに花粉症がやってきた。症状はみなさんほど重症ではない、連発クシャミも10回ぐらい、ハナタレ・ティッシュも10枚ぐらい、あとは普通だと言いたいけれど、「ねむい だるい」となんだか体調はよろしくない。体調のよろしくないのが、3月から夏近くまで続くのが例年の傾向、元気がない期間が続くのは嫌だネエ。

展覧会を見に来た八木さんが、「薬を飲むのは きれいだが 鼻の中を 洗うのは 許せる」という話を聞き、「どこの薬屋にも売っている」と二人で早速近くの薬屋で1000円の物を買った。ポンプといっても、おもちゃのようなもの、洗う液が900円、ポンプが100円、と皮算用、早速鼻に吹き付けた、これはいい。

山仲間の看護婦・前川さんが、「薬が効く ずいぶん楽」という。ならばと飲んでみた。花粉症は何かのアレルギーだという、それが杉の花粉であったり、埃であったり、PM2であったりするのかな。

河原ではからし菜がぼつり咲きだした。冬の河原は枯草で覆われていた。枯草にひょろり緑の茎が伸び、葉が芽を出し、今ではひざぐらいの高さの緑が覆っている。その緑の上にレモンイエローが点在している。もう少しすると他の風景を隠すぐらいの多さ、分厚さのレモンイエローが河原の空間をうめつくす。

ハナタレになる、クシャミが連発する。病気ではないが、なんだかだるい、なんだかへんだ、これはよくない。マイナスの位置、負の傾き、これはよくない。マイナスならプラスに転じたい、プラスとマイナスが真逆のものだなんてありえない、プラスとマイナスはそれぞれが反対方向に在るのではなく、そう、先日もおもしろいことを言っていたひと、「対称のゆがみ」これはまさにヒトの歩み、生きざま、プラスとマイナスは反対のものではなく、次元の違うもの、そのどこかにオレがいるだけ、もっと言うならその存在する位置さえ確かなものではないのでは。ヒトとは所詮そんなもの、存在も確かさも探索してはいけないもの、なのだ。

「ヒノキの花粉かな 花粉症の原因は」オレが例年、ハナタレになる、クシャミが連発する。ここ数年の毎年、3月の展覧会ごろから夏ぐらいまで、長い何か月か、ハナタレとクシャミの期間である。「スギならもう少し早い 二月 三月」だという。話は飛んでしまうが、先日読んだ本に、戦後、住宅復興のためにスギやヒノキの植林がさかんにおこなわれたという。奈良は吉野杉で有名なところだったが、ヒノキもどんどん植えられたらしい。建築材料としてはヒノキが一番適しているらしいが、スギもすてたものではないという。古代から官営の建物、宮殿や社寺仏閣という壮大な建造物にはヒノキの大木が使われた。ヒノキは日本と台湾にしか育たないようだ。太古から在ったヒノキの大木をどんどん切り倒し、日本全土にヒノキの大木はもうなくなってしまったらしい。常岡棟梁が、「千年育ったヒノキで 造った建物は 千年もつ」と言っていたように思う。百年、二百年、程度のヒノキはまだまだ存在するが、千年物は皆無らしい。台湾には千年ものは残っているが、もう伐採禁止になったとか。

埃で思い出すのが我が家の改築工事、もう7,8年前になるのかな。もうもうと埃が舞う2階のアトリエで生活していた。「すさまじい ほこりだ」と思ったが、工事現場で常時働く職人さんはそれこそ大変だ。どうもあの頃から、オレの気管支はおかしくなってきたのかな。

先日来何度も繰り返し、図書館から借りている本、あらためて見ると、「民衆史の遺産」という題名。全十五巻あり、一冊なんと6000円也には驚いた。しかし人気がないのか、いつも書架にあるのでいつでも借りられる、ほとんど新品でありがたい限り。今回は、「金属の民」と「鋳夫」を借りてきたが、鋳夫の項は石炭鋳夫の話が主で近代の話になる。金属の話は明治以前の鋳山の話、これはおもしろい。水銀の赤の世界の話は感動もので、以前もここに記した。別の本、「里山」で、鉄はどうして作られたのか、目からうろこで、「そうだったのか」とわかった。タタラや砂鉄の話からの説明では、どこに何をどうするのかわからなかったが、里山の本では、山の麓の樹々や木炭から、木炭と砂鉄を混ぜて炉で燃やして金属を得るという説明で、「おお ということだったのか」と納得したわけ。今は、この納得で言い、詳細、例えばどういう形の炉で何度まで上げて・・というようなことは他の人に譲りましょう。中世時代、花崗岩の中に鉄の成分が含まれていることを知っていた人たちが、花崗岩を砕き、川に流し、重いものから早く下に沈む、それを繰り返して鉄が多く含まれた砂、「砂鉄」を取り出す。集めた砂鉄と木で作った木炭と一緒に燃やす。温度を上げるために風を送るふいごの装置を、「たたら」といい、そのたたらを踏んで、何日間か炉の中で燃やすと鉄が取れる、なるほどそうだったのかとわかった。先日見た多田銀山の資料に、金属が含まれた石の何種類かを見た、採掘場の石ころも拾ってもって見た。「金属を含んでいるのかな」と思うだけでなんだか他の石よりズシリ重い気がしたが本当か嘘かわからない。その時にできる、滓（かす）も見た。鉄滓（てっさい：金糞ともいう） 金糞という言葉が鉄の滓なら、あちこちにある金糞がついた地名、ここではかつて石から鉄を造っていたのかと感慨深い。三十歳代に比良の金糞峠を歩いた時には、「ケタイな名前」ぐらいにしか思わなかった。

古代近代の日本、鉄製品は多くあったはず、建築土木、生活雑器、武具、農具と並べ立て、「あれも これも 木製や 陶製より 鉄がいいはず」と思いつく。そんな鉄を国産で賄うとすると相当量の鉄の需要があったのでは。需要に応えるべく、山の中で昼夜分かたず炭をくべ、タタラを踏んで、火を燃やしていた人影を想像するだけすごいです。比良の金糞峠も、登るには相当きつい、そこに人が集まり24時間体制で働く姿を想像するだけでもすごいネエ。

石塚尊俊著<鑪と鍛冶：採掘冶金の民俗>

<無知な話：「冶」と「治」の話：まず告白。「冶」この漢字知らなかった。「や」と読む 溶かす 柔らかくする>

◎採鋳に始まり、冶金・鑄金あるいは鍛鉄と続く一連の技術は、我が国においてもすでに先史時代から始まっているが、その具体的なこととなると、まだよくわかっていないむきが多い。<略>おそらくはじめは掘ることから溶かすこと、加工することに至るまで、みな同じ集団によっておこなわれていたに違いなかろうと思われるが、はなはだ漠としている。時代が近世にまで下ると、文献も遺跡も残り、集団の末裔も転業こそしていても、その所に居を構えている。かつての採鋳・冶金・鑄金・鍛鉄の徒の生態を眺めてみたい。

◎鉄精錬のような高度な技術はなかなか習得しがたいという向きもあるが、青銅の鑄造についてはすでにはっきり銅鐸・銅矛などの高度な技術を駆使した国産化が証かされている。<略>鉄の精錬は弥生期に十分遡れるとみてよいのではなかろうか。一例として北九州今山遺跡を境にした石器の忽然とした消滅、そしてそれに接続するかのよう急激な鉄器の普及があげられる。<略>一方技術の面から、良質の鉄鋳石碎末を用いた場合、ほとんど鉄滓はでない。砂鉄を使用すると鉄滓（カス：金糞）が出る。日本は火山国なので砂鉄はあるが鉄鋳石の資源には極めて乏しいが、砂鉄を原料とするよりも、十分な選鋳を経た鉄鋳石の方が、生産に習熟しなかった初期の段階には生産が容易といえる。

◎蝦夷地：多賀城碑（762年に建てられたとされる）「多賀城去蝦夷国界百二十里」これは今の東北地方以北、もちろん北海道も含め蝦夷の領分になっている。蝦夷の人々は朝鮮、中国、ソ連から渡ってきた渡来民族と仮定できる。彼らは、トルコ系遊牧民族、匈奴、柔然、突厥（突厥）（4・6Cユーラシア大陸で活躍した民）と呼ばれた種族であり、原始的な鉄器文化を持った人々だと考えられる。日本のような地理的条件の島国には、「良くいえば 新天地を求めた意欲に燃えた開拓者 悪くいえば前住地での敗北者の到着地である」★先生の話、今でも新鮮なのか否か・・？

先日読んでいた「民衆史の遺産」という本は、オレにとってどういう魅力があるのか、こんなしちめんどくさい本を、何が面白いのかと考えてみた。(しちめんどくさい：書きながら疑問符がわき調べた。老人が使うがどういう意味？と質問もあった。辞書では「面倒臭い」煩わしい、厄介と出ている。しちは七である、「七面倒臭い」が正式漢字。七は接続語ではなはだしいこと) ちと脱線しましたが、おおよそ歴史書というのはその時代の権力者、日本では天皇や将軍を中心に時代の移り変わり、「あの時 誰が 何をした」「それを受けて こちら側と あちら側が 動いた」と名前の知られた人たちの活躍やら無念やらが語られる。月日と場所でその時の権力者が、日が変わり場所が変わり権力者が変わり、権力者から権力者へ、権力者の名前、その月日、その場所とそういう流れを覚えさせられた。歴史好きの人たちは、「後醍醐天皇がいい」「家康がすごい」と喧しい。そんなに皆さん、歴史が、英雄が好きならと、NHKは毎年、中世近世時代の英雄の大河ドラマを作るが、オレは永らく見たことがない。もちろん若いころに、それらの英雄たちの物語や簡単歴史を、血沸き肉踊らせて読み漁ったが、半分は忘れてしまった、「みなが すきなら もういいや」と天邪鬼である。

最近、時の権力者、体制側の人たちではなく、一般大衆の歴史に興味がある。日本は中世近世から農業国家、米中心に動いていたように思う。農家、百姓は、常民とか良民と言われ、それ以外の産業従事者は身分が一段低いように扱われているのではないかなと思う。またそういう一段低い仕事とか集団とかに蠢いている人たちの歴史というのか話はなかなか出てこない。この「民衆史の遺産」という本の中には、このような“しちめんどくさい話”がこまごま書かれている。執筆者もたくさんおられ、山の民・海の民・芸能の民・鬼・賤民・遊女・巫女・といくつも続く。また同じ鉄関係の話でも、考え方の違う方々がおられ、違った意見、内容の違う論調もたくさん出てくる。古代の歴史のこと、学者の先生方も、「これを中心にこの方向」「いや あれをとって こっちの論調」といろいろ意見があってこれまた面白い。どの項だか忘れたが、「修験道の集団の人たちが 古代日本の 鉄関係の 技術集団だった」という意見もあった。大峰奥駈道を歩いた経験のあるオレにとって、吉野から熊野までの山の稜線道のどこかかなと興味深かった。世界的に鉄の生産は中国が最初の国らしい。その技術が北の方に、今のモンゴルあたりに伝わり、その人たちが日本にやってきて鉄を始めたという説もある。いずれの先生方も論理的に演繹法で、三段論法で、「だから である」と自身の理論を公表されている。1000年前、1500年前のことをあれこれ想像して考えるのもこれはなかなか楽しい。

◎こんにちその技法が詳しく伝えられている“永代たたら”それが完成したのはようやく江戸時代。そのころの日本の主要鉄生産地は中国地方(島根・鳥取・岡山・広島)と東北地方(岩手・宮城・青森)だった。年間生産量は1万トンぐらいと推定される。

◎これも以前に読んだことだが、鉄関係従事者は近隣の百姓だった。稲造りの農閑期、おもに秋から春にかけて鉄造りに従事した。山の中で昼夜三日四日かけ、一回に二トン三トンといった乏しい生産量の鉄を生産した。

◎西暦1000年ころ、「政事要略」の「交替雑事」に絹・綿・調布・鉄・鍬(くわ)等諸国の産物の比価が載っているが、当時の価格を知るのは難しいらしい。

◎公文書・伝聞を纏めた「陸奥話記」に、源氏軍の夜襲にそなえ、敵兵の足を負傷させる目的で、刃の付いた鉄を立てたり蒔いたりしたことが書かれている。これは江戸時代の忍者が使った鉄ハマビシの初期の形と考えられる。古く韓国の文献にも登場する。このような消耗品にも纏まった量の鉄が使われていた。

◎青森県で発見された、「東日流(つがる)外三群誌」「本書をうのみに史実の飼いとすべからず」とあるが・・・。「宇蘇利浜造鉄図」があり津軽近辺と想像される。砂鉄の大量確保から本格的鉄生産を目指し、領主の命で雲伯(うんぱく：出雲は島根県東部と伯耆は鳥取県西部の併称)地方に技術修業に出向き、習得した技法で操業したのだろう。出雲の“永代たたら”の築造法に似ている。1341年の大津波で製鉄関係が破滅してしまった。

◎日本刀の玉鋼(外国人の間では超貴重品)、南蛮鉄：ヨーロッパからの鉄は、当時の将軍、大名、上級武士らが舶来品崇拝で大人気であった。古代中国でも辺境のシルクロード地帯から、ペルシャからパミールやタクラマカンからの鉄材を、絶品と称して珍重していた。現代の科学分析ではそう変わらないらしい。

◎箕面ハイキング、川沿いを歩いている。70歳過ぎの男女16名、箕面駅を10:30に出発した。「お気軽コース」と「健脚コース」があり、お手軽コースの方々は、箕面の滝から引き返し途中の豪華レストランで、モミジのてんぷらを始めとするフルコース料理とビールが待っているらしい。箕面の滝は、大阪の小学生の遠足のメッカ、みなさん遠足に来たことがある記憶が残っているらしいが、昨日のこのように思い出す人はいなかった。こんな川沿いの道だったのかと思い出せないまま、土産物屋、料亭、床が並ぶ昔の風情を感じながらウキウキ歩く。今でこそ、「ちょっと行こうか」という処はたくさんあるが、箕面は、昔の観光地の雄、今日は月曜日だけれど人は多い。

◎がけ崩れ工事中ということで舗装道路が塞がれ、昔の登山道を歩かねばならない。山慣れしていない人たちには酷な道かもしれない。4月中旬、ここは紅葉で有名な処、モミジの樹々の萌える緑がすごい、まさに若草色が斜面を飛んでいる。勢いよく水が流れる、滝がある、ごろごろ石がある。

◎「この滝はこんなに太かったかな」「そばに寄ると水しぶきがすごいね」滝ではたくさんの方がいる、記念撮影をしている、我々も小西カメラマンの集合写真撮影、「滝をバックに前の人はもっとかがんで」水音に負けじと怒声をとぶ。ここから「お気軽コース」組と別れ9名で勝尾寺コースを進んだ。「お気軽コースという命名はちょっとよくないね」「自分までお気軽な気分になるもんね」と冗談が聞かれた。

◎看板では、このあたりは「広葉樹林帯」クリ・クヌギ等が茂る。その樹液をめぐらして甲虫類、蝶類の天国だと書いてある。「松は少ないね」「あれがカシ・ツバキ」「手塚治虫もこのあたりの虫を見るためによく来たらしいよ」次の看板には、「常緑・落葉混合林」ここでは日光がよくあたるので明るく色々な木がひしめき合って茂っている。それに比べ、スギ・ヒノキの植林地帯は下ばえもなく薄暗いとの説明看板。

◎地衣類は、このあたりに樹皮や岩についている青灰色のもの。地衣類は藻類と菌類が互いに助け合ってひとつの身体になっていて、高山や極地でも生きていける、これを共生といいます。菌類は身体の中に藻類を住ませ、藻類は光合成によって得た養分を家主に与える。「おおおこれはしらなかった 苔だと思っていた」と大興奮である。

◎隠花植物とは、シダ、コケ、藻、菌などです。＜隠花植物と顕花植物は、咲かないもの、花が咲くもの、その対語であり、かつて下等植物とみなされた生物に対して使われた分類用語＞なんとこれを聞くと、「区別、差別されていたとはそらあけしからんてなことならますます隠花植物 気にいるぞ」隠花植物は、コケ、シダ、藻類、菌類だそうだ。

◎今回の山の説明看板で、「地衣類」「隠花植物」という二つのことを教えてくれた、まったく知らなかった。山にはいったらどこにでもある緑っぽい灰色のカビらしきヤツ、これが地衣類で、山の地べたにはいつくばっている彼らが、隠花植物とは知らなかった、いいことを教えてもらった、これからの山歩きは、地衣類と隠花植物の検索でオレの興味も開かれていくやもである。

◎滝から歩き出して1時間足らず、「時間が12:30なのでここで昼食にしましょう」「ビールを飲もう山のビールは最高お前が一番の酒飲み どんどん飲んで」と渡され、山の上では飲まないのだがと心の中で思いつつ、グビリ旨い。今回の隊長は自転車で鍛えている松田さん、軽い足取りでどんどん歩く。東海自然歩道の起点でトイレ休憩の後、勝尾寺まで車道歩き、「勝尾寺の文字を背景に 集合写真を撮ること」の小西指令で、そばの女性に撮影を依頼。

◎「さあここからどうして帰ろう」「ぐるり 滝に戻るもよし」「勝尾寺参道を まっすぐ麓まで 下るコースもある」「なら参道を下ろう」とみなさんの意見。なかなかの健脚、ばてた様子もなく、はつらつと歩き始めた。今でこそ箕面山中も舗装された車道が整備され、勝尾寺も霊園もスイスイ車が走る、あつという間に周辺の町に到着するが、道のない時代は低い山とはいえ人々は歩いて上り下りをしていたのだ。行商に、お寺参りに、里帰りに、日本のどこの山でも見られた光景だ。

◎小鳥がふわり目の前を飛び立ち地面へ、次にすぐそばの梢へ、なんと凶鑑で見るとコマドリである。「人懐っこい鳥あれがコマドリか・・・」とびっくり。小鳥のことを記した看板もあったが、今回もりだくさんすぎてやめておく。

◎バス停のある国道171号線に降りてきたのは4時、みなさんよく頑張りました、なかなかの健脚ぞろいである。バスは茨木方面へ、反対側の千里・石橋方面へそれぞれ分かれて帰った。我が家には5時に帰り着いた。

今日は4月の下旬、毎日通ってきている安威川の河川敷にいる。あらたまってまわりを眺めてみる、毎日通ってきているというわりには、季節のことを感慨深げに眺めていなかった、日常の延長で、「そこにオレが居ただけ」といういい訳なのか、開き直りなのか、はたまた悟りきった境地なのかと苦笑する。水が流れる中洲では草が1メートルぐらいの背丈に成長してきている、真夏には倍以上に背丈が伸び対岸が見えなくなる。今は1メートルとは言え、からし菜の黄色い花がポツリしかない。黄色、絵の具で言えばレモンイエローだ、まだ季節が早いのか、それとも今年はからし菜の繁茂が少ないのか、オレの例年の記憶では、レモンイエローが絨毯状に緑を覆いつくすのだが、このポツリはちょっと淋しい。河川敷の所々の土の上には、ひざぐらいの高さまで草が伸びてきている。これも真夏には背丈ぐらいまで背を伸ばし、雨の後などは水滴が葉についているので、上着がびしょ濡れになる。そのひざぐらいの草の中に花がたくさん咲いている。クローバーは知っている、それ以外に白色、黄色、ピンク色、紫色、草の花はさほど大きくならず、オレの指先より小さいものが多い。

一昨日は衣川さんが、「アトリでのもう」とやってきて、ビール、酒、ワインをいただいた。昨日はシエスタ倶楽部の向井先生指導の教室展覧会のオープニングパーティに呼んでもらい、ワイン、ビールをいただいた。二日続けて酒を飲むのはよそうと自粛しているのだが、「旨いものは美味しい」と自粛ができず二晩とも酔っぱらった、いい気分の日を過ごした。

昨日はまず娘の所にコーヒーの配達、「コーヒー豆やが あるなら 買っという」とタケさんに頼まれた。次はカメラマンの中西さん宅に車を走らせた。「まだ バッチがわからん 指導に来て」と向かった。この話は、中西さんが茨木千題寺あたりを20年間撮り続け、2月の新名神開通で一応撮影の幕を閉じた。とりに撮った写真8000枚を千題寺の方々に納品するにあたり、「TIFFじゃなくてJPEG画像でほしい」という希望に沿うため、「これから8000枚 変換が大変じゃ バッチという 技法が あるらしいが チンプンカンプン」このことからバッチ騒動が始まった。「それじゃ アルバイト代 1万円」という谷さんを連れ、中西スタジオへ。「えええ こんな 簡単に できるの・・・」と作業はあっという間に終わったが、翌日中西さんから、「横で見ていたが わからん なにがなにやら 来てくれ SOS」と連絡があり、自身のウィンドーズで試験、「これで バッチは ぼっちり」なんて意気揚々と中西宅に乗り込んだ。「あれれ おかしい」「むむむ ウインと マック の違いが・・・」と四苦八苦の末、1時間がかりでやっとできた。中西さん自身で3回ほど別の写真を試し、「おおお これでわかった 7月まで待ってくれ と 言ってある納品がもっと早まりそう」と喜んでもらった。

オレも昔は、パソコンには苦労した、ところが最近のパソコンはおいそれとは壊れない、いつも言うことを聞いてくれる安心している。これが良くないのか、パソコンの修理、整備をしないと忘れてしまう、基本を、フリーズを、おかしい時はここをこうしてと、手馴れていたのが嘘のように忘れてしまっている。そういえば車もそうで、今の車はボンネットを開けても何もわからない、同じように、パソコンのふたを開けようとしないうちに、パソコンがスイスイ動くぶん、故障も、不具合も、新しいことも、できなくなってきている、手も足も頭も動かない。

中西宅が終わって、衣川宅、「北海道の打ち合わせ アトリエで飲もう」ということで茨木の我が家へ。「北海道に同道しませんか 旅費は全部 出しますよ」とありがたい話。それではと、「ふらふらペインティングの旅-北海道-II」を考えている。絵を描きたい山も登りたい、「よし 描くぜ 登るぜ」とはしゃいで飲んだ。

翌日は、「今日のパーティは ほどほどに」と出かけたが、たくさんの知った顔、話すうちにほわり楽しくなり、またまた酔ってしまった。ここのパーティは女性の方々が自前の料理を持参される、うちのパーティはお惣菜を買ってきてもらうのに比べ、みなさん腕を競っておられる。肉も油ものもあるが、オレは野菜に手が伸びる、野菜が旨いね、肉よりも野菜が好きだねえ。そうそう気付いたことは、ここでも、うちでも、パーティが始まると、机の前に陣取り、食うわ飲むわ動かない人がある。マナーが悪いね、陣取った場所からは動かないぞといふのかな、後の人が食べ物にありつけない。呑み助のオレはいつもうしろで飲んでいて、これも嫌がられているかな。最後に記念撮影、建築カメラマンの先生が撮影、「記念撮影は みんなの顔が写ってなんぼ みなさんを上手く並べるのが私の仕事 写真はカメラが撮ってくれる」なんて笑いながらの顔の交通整理、「まだかな 時間が かかるな」とぼやきも聞こえる。

先日のハイキングで、「大発見：地衣類と隠花植物とは なんだ」と心の中で叫んで以来、世の中には知らない植物がたくさんある、「植物とは 草と 木と 花 だけじゃないのだ」「わくわくするような奴が まだまだ 潜んでいる」ということに気づいた。山が好き、アウトドアが好きなおれにとって、石や土を見て、地面の草を見て歩くのは苦にならない、もう少し注意をして目を光らせていれば、ケタイな奴が見つかるかもしれない、これからの山歩きにひとつ楽しみが増えた。

いくつかの本を借りてきた。粘菌・キノコ・苔、などの本をめくっていて、「ギンリョウソウ」という草の写真を見つけた。「おお これは知っている 見たことがあるぞ」2,3年前の福井県赤兎山を登っている時、水が流れる谷筋にこの草があった。「なんだあ これ 見たことがない」「ケタイな草 幽霊でも出そうな・・」という印象を持った、写真も撮ったがそのまま忘れていた。全身白色と言っても、今まで知っている白色の花の白さとは違う。今までの花の白は、白色顔料で描ける、白色絵の具の色だったが、ギンリョウソウの白色は、色が抜けた白色、おかしな言い方かもしれないが、負の色だと感じた。しかも全身がそうなのだ、花だけではないのだ、そんな白いやつが、土筆ぐらいの大きさにひょろり立っていた。

本の中に、「ギンリョウソウ」「腐生植物（ふせい）」と書いてある。＜この名は現在「菌従属栄養植物」と呼ぶようになったそうだ。＞このギンリョウソウ、幽霊茸という別名でもわかる通り、その生活について長いこと誤解があった。これは腐生植物一般に言えることであって、ギンリョウソウに限った話ではないのだが、「腐生」という言葉に引きずられ、誤った理解がされてきたのである。いや、そもそも、「腐生」という呼び方を始めた当時は、それが誤解だとはみんな思っていない。腐生植物とはその呼称の通り、ものが腐ってできた養分を吸収して暮らす風変わりな植物の事、と思われていたのである。つまり、ミカンが腐って生えてくる青カビのように、ものを腐らせて養分を摂る、あるいは腐ったものから栄養を摂る植物と思われていたのだ。私＜塚谷祐一先生：東大教授＞が高校生のころ買った図鑑には、ギンリョウソウは動物の死体や排泄物に栄養源を求める植物だ、と解説してあった。「この草のあるところには かならずネズミの死骸がある ときいた」と書かれたものさえあった。

カビやキノコは腐った物の上に生える。ギンリョウソウはカビやキノコを食べて暮らしている。腐生植物がキノコの生えるような薄暗い湿ったところにあるのは彼ら自身が、カビやキノコのような生活をしているからではなく、その食糧、獲物であるところのカビやキノコがそういう場所に多いからにすぎない。ランもカビやキノコを食べて暮らしている。あのデンドロビウムやシンピジウムの洋ランも例外ではないらしい。腐生植物は光合成をしないので葉緑体がない、緑色がない。

もうひとつ面白いのが、「粘菌」の話。粘菌は、昔から、南方熊楠の話から知っていた。以前TVの画像で、「えええきれいな 不思議な」と思いつつ、こんなヤツがいると見せられたが、まだ実物はお目にかかったことはない。

新井文彦著＜粘菌生活のススメ＞著者は写真家らしい。まず本の命名が、「くさいねえ」と思いつつその内容は真摯だ。本の中には幾多の粘菌が載っている、「きれい おもしろい すばらしい」と実際に見てみたいと切に思っている。◎粘菌には、「菌」という言葉が使われているが、いわゆる菌類ではありません。カビやキノコや酵母など真菌類とも、納豆菌や乳酸菌など細菌類（バクテリア）とも、生態的にはまったく関係なし。粘菌はアメーバ動物の一種、動物でも植物でも菌類でもない。粘菌はまたの名を、「変形菌」と言います。1906年に南方熊楠の紹介にあたり、英語の、Slime moldsを直訳して粘菌と名付けた。粘菌の最大の特徴は、変形体が動物のように動き回って微生物を捕食する。粘菌の個々の名前は、「マメホコリ」「ムラサキホコリ」「～ホコリ」と付く。大きさはマイクロメートルという目には見えない大きさだそうだが、クローン増殖を繰り返し、ねばねばぬるぬるの変形体となり、熊楠がいうところの、「混沌たる痰のような」変形体が時速数センチの速度で動き回る。ほんとみたいねえ。

ここでちょっと疑問、普通の植物も、養分を捕食するよねえ、腐った物も好きだよねえ・・？